

足軽の武術・教義

足軽（歩兵）は武士階級でも最下級に位置付けられましたが、中には非常に優れた人材も存在しました。彼らは常時訓練され、厳格に教育を受けていました。

武道：

江戸時代（1603—1867）の武道には、刀剣訓練（剣術）、槍訓練（槍術）、弓訓練（弓術）、火器訓練（砲術）のほか、さまざまな規範がありました。歩兵として、足軽はこれらを訓練し、その技能をもって仕えることとされていました。しかし、江戸時代は比較的平和な時代だったため、戦場でこれらの技術を利用する機会がほとんどありませんでした。かくして武術訓練は、身体と精神を磨くための「戦士の作法」の一種となりました。これには、甲冑を点検し補修するという日々の責務が含まれています。原則として、足軽は常に戦闘に備えていなければならないからです。

また、加賀藩（金沢を中心とする封建時代の石川県）には、武道の向上のために設立された「経武館」と呼ばれる学校もありました。この学校は、初期の頃は上級藩士の子弟のみに入学が許されていましたが、その後は足軽の子弟も登校を許されました。

清水家には、江戸時代に足軽が武道を勉強するため使用したと見られる武術書が展示されています。

教育：

足軽の業務には、藩財政管理のための計算事務のほか、重要文書の分類や取扱もありました。そのため、足軽は武士の「最下位」に属していたにも関わらず、もっと上級の武士と同様の教育を受ける必要がありました。18世紀前半の武士の回想録においても、「戦争時代の武士は文盲でも問題なかったが、平和な世界ではそのような言い訳は通用しない」と明記されています。

このようなわけで、足輕は公務と内職で多忙であったにもかかわらず、教育にも時間を割かなければなりませんでした。文学、歴史、俳句（17音節の日本の伝統的な詩）と日本の詩歌教育に投資をした結果、中には相当の教養を積んだ人物も現れました。このことは彼らの庭園の優れたデザインや、彼らが残した文書で垣間見ることができます。このような教育への投資の結果、藩の財政再建への提案によって大きな出世の機会を得た18世紀の大槻朝元(1703-1748)の例に見られるように、足輕が身分をはるかに超えて大出世する機会を捉えることもあり得ました。